



Title	研究留学生のための総合的初中級教材
Author(s)	福良, 直子; 丸山, 樹里; 山崎, 深雪
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2008, 12, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/50724">https://doi.org/10.18910/50724</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 研究留学生のための総合的初中級教材

福良 直子\*・丸山 樹里\*・山崎 深雪\*

### 要 旨

本稿は、筆者らが現在作成中である、総合的な初中級教材『日本語で研究生生活』（仮称）について、それがどのような学習者を対象とし、どのようなニーズに応えるものとして作成されているか、並びに、その学習活動の特徴を述べるものである。この教材は基礎的な日本語能力、一般的なスタディスキル、さらに研究生生活に必要な技能の習得と、人的ネットワークづくりの支援を目指している。本稿では、まず本教材の作成経緯と目的、次に構成と学習活動の内容、最後に試用しているクラスでの実践の報告と今後の課題について述べる。

【キーワード】研究留学生、初中級教材、研究生生活、人的ネットワーク、質問、話題

### 1 はじめに

#### 1-1 作成経緯と目的

本章では、『日本語で研究生生活』（仮称）<sup>1</sup> がどのような学習者とニーズに対して応えようとしているかをより明確にするため、まず、本教材を作成する前提となった学習者とカリキュラムの概要について述べる。次に、そのニーズと従来の教材とのずれについて述べる。最後に、新しい教科書のコンセプトについて述べる。

#### 1-2 クラスの概要

『日本語で研究生生活』は、予備教育期間の研究留学生を主な対象とする。現在具体的に想定されているのは、大阪大学留学生センターにおいて「研修コース」と呼ばれる集中的な日本語教育の課程である。

このコースは大学院入学以前に半年間の予備教育を行うもので、レベル別に3クラスに分けられている。筆者らは、真ん中に位置する「Bクラス」を担当している。このクラスは、初級前半レベルまでの、自習も含めて少し日本語を勉強した学習者を中心とするクラ

スである。学習者数は10名前後で、小規模なクラスである。

授業のスケジュールの概要は次のようなものである。

週単位では、月曜日から金曜日まで授業があり、基本的には午前と午後で授業形態が異なる。午前の2コマは月曜日から木曜日まで連続しており、Bクラスの学習者のみで、一斉授業が行われる。コース開始時の1ヶ月ほど、留学生センターの開発教材（『A Reference Manual for Learners of Japanese』<sup>2</sup> 以下『RM』）を用いて、初級前半程度のレベルまでの日本語を学習する。教室活動としては、口頭表現の練習の割合が高いが、並行して文字、さらに作文の学習などが行われる。その後2冊目の総合的な教材に移行する。他に独立した文法のクラスが2コマ設けられている。

午後は大阪大学内の他の学習者と共に初級後半レベルの技能別クラスに参加する。これは「選択授業」となっているが、Bクラスの学習者に関してはカリキュラム上必要な授業が決められており、学期を通して、読解、漢字、プレゼンテーションの授業を受講する。

学期全体のスケジュールで、大きな位置を占めているのが、「発表会」である。これは1学期間で、中間と期末の2回開かれる。発表は日本語で行われ、近

\* 大阪大学留学生センター非常勤講師

年はプレゼンテーションソフトを使用するのが通例となっている。中間の発表会では主に学習者の母国に関することをテーマとし、期末では学習者の専門に関連する話題を取り上げる。この発表の準備に、午前のクラスとプレゼンテーションのクラスの一部が充てられている。

Bクラスでは、これらの学習活動によって、身近な事象の表現から、一般的・抽象的な話題へと表現が広がることが目指されている。

### 1-3 従来の教材とニーズのずれ

前節で「2冊目の教材」と言及したのが、本稿において研究対象とする教材である。

Bクラスではコミュニケーション能力の育成が優先されるため、文型シラバス中心の教材は用いられない傾向にある。1冊目の教科書である『RM』も話題と機能が重視されている。それに続く初中級の学習段階においても、話題シラバスの教材が求められてきた。そのため、本教材以前には、大阪市教育委員会が大阪の阿倍野日本語読み書き教室のメンバーに委託して作成された『あいうえおで日本語』（以下、『あいうえお』）という教科書を使用していた<sup>3</sup>。

この教材は『あいうえお』冒頭の「メッセージ」によると、地域の識字・日本語交流教室で、日本語学習者とそのパートナーである日本語ボランティアが、お互いを知り合い、お互いの文化を尊重しつつ、一緒に日本語の言葉や日本での暮らし等を学んでいく、おしゃべりの素材であることが目指されている。

話題は「連絡は電話で」（連絡方法）、「ペットは友達」（ペット）、「俳句を楽しもう」（俳句や季節）、「女と男」（ジェンダー）など多岐にわたり、また、大阪の地域に密着した「大阪めぐり」（大阪観光）などもある。前述の「メッセージ」によると、それらの話題について学習者とボランティアがいっしょに考えたりしゃべったりできるテキストとして作られている。

この教材を用いることにより、全体として活発な議論ができるようになったが、期を重ねるうちに、Bクラスで用いることによって生じる問題も明らかになっ

てきた。

まず、最も根本的な問題は、学習者の違いである。『あいうえお』は地域で生活する外国人のために作られているのに対して、Bクラスの学生は生活の主な場所は大学であり、全員が大学で研究するという共通項を持っている。そのため『あいうえお』では優先順位の低い、学生生活や学問分野に関係がある話題が求められる。その一方、地域での生活においては優先順位の高い、ごみの分別の方法やコンビニの商品の種別などにはやや関心が薄い。

次に、学習活動の違いである。『あいうえお』は日本語による交流をすることそれ自体を重視しているが、Bクラスでは、それに加えて、学生生活に必要な技能や知識の習得を図る活動も要求される。それに伴い、学習すべき語彙、文型も異なっている。

### 1-4 研究留学生のニーズの再検討

前節で述べたような経緯で、新しい教科書の作成が必要になり、Bクラスの担当者である筆者らが予備教育の学習者のニーズを踏まえた教材の作成に着手した。

Bクラスの学生のニーズは以下のようにまとめられる。

- (1) 日常の生活を円滑にする
- (2) 大学での研究生生活を円滑に行う
- (3) 高度に専門的な分野での研究を日本語を用いて行う

(1)に関しては、一般的な初中級者のニーズであるが、その中でも、日本にまだ慣れていない、一人暮らしの20～30代の学生の生活におけるニーズと考えられる。

(2)と(3)に関して、我々は、大学での研究生生活に必要な日本語と、専門分野の研究において必要な日本語を区別している。(2)は「研究室生活」とも言うべきもので、理系、文系、研究室の個性などという差はあるにせよ、大学院生が大学という場で共有しているものである。(3)に関しては、従来「専門日本語」の分野で主に専門別に語彙・表現の抽出などがされてきたが、Bクラスのような研究留学生のクラスでは、学習

者の研究分野が多岐に渡るため、それぞれの専門に応じた内容にするのは難しい。一方で、教育程度が高い彼らに共通しているのは知的な情報交換をしたいという欲求が高いことと、周りからもそれが期待されていることであると思われる。以上の点から、筆者らは今回の教材作成に当たり、研究留学生の日本語クラスでは、知的な話題についてコミュニケーションが図れるようにするための漢字語彙や、やや硬い表現、一般的なスタディスキルの習得が必要とされると判断した。そして、興味に応じて必要な表現を増やしていけるような自由度が高い教材であることが望ましいと考えた。

また、予備教育期間の後、この学生たちの多くに共通する学習条件として、次の点が上げられる。

- (4) 日本語クラスを受ける時間的余裕がない
- (5) 常に、日本語のサポートを受けられるとは限らない

つまり、多くの研究留学生の予備教育期間終了時の到達レベルは中級レベルであるにもかかわらず、その後は自立的に日本語学習をし、日本語で研究室での生活をマネジメントしなければならないということである。また、(3)のニーズを満たすためにそれぞれの研究室で必要な日本語の多くを自分の力で獲得しなければならない。

上記の(1)～(5)を勘案し、筆者らは予備教育の学生に共通するニーズとして、日本語の基礎的な能力に加え、大学院生、研究生としての知的な表現、一般的なスタディスキル、さらに自立的に研究生活を進めるために、自らネットワークを作り、情報を自ら引き出す能力が求められると考えた。そして、このような教材の特徴から本教材の仮称を『日本語で研究生活』とすることにした。

#### 1-5 本教材のコンセプト

1-4でのニーズ分析から、『日本語で研究生活』のコンセプトは次のようなものとなった。

シラバスは話題シラバス、タスクシラバス、技能シラバスを組み合わせたものとし、学習活動には情報の収集や人的ネットワークの構築を図るものを組み込む。

話題シラバスは情報を引き出したり、議論をしたりするための語彙、表現などの知識を得て、それを運用する練習をするためのものである。取り上げる話題は学生が興味・関心を持つと考えられるものの他、日本で安全かつ快適に生活する上で必要な知識も含む。学習活動としては「質問する」ことを重視する。「質問する」ことは、『あいうえおで日本語』においても多用されていたが、本教材の学習目的では、『あいうえお』の目的であった「交流」以上に、情報を引き出したり、それを活用して研究留学生としての自己の考えを述べることに重点が置かれる。また、それぞれの話題において各自の興味に応じて発展的な学習が図れる内容とすることも重要である。運用力の向上は、さらにタスクシラバスに含まれる教室外でのものなどの自律的な学習活動でも促される。

また、技能シラバスは、大学生活に必要なスキルを身につけるために、文章の読解と作文、ネットによる情報検索などのIT関連、グラフや表の読み取りと説明などの、項目を組み込む必要がある。

Bクラスでは、以上の内容を具体化した教材を25期(2006年秋学期)から現在の27期(2007年秋学期)まで、3期にわたって改定しつつ試用している。以下の章でその内容とそれによる学習活動について述べる。

## 2 本教材について

### 2-1 『日本語で研究生活』の構成と使用の流れ

テキストは、1-3で検討したことを踏まえて、研究留学生にとって身近だと思われる10の話題を選び、それぞれの話題を一つの課とした10課で構成されている。研修コース第27期で使用したテキストでは、以下のような話題を取り上げている。

- 第1課 教育
- 第2課 家
- 第3課 旅行
- 第4課 食べ物
- 第5課 仕事

第6課 サイン

第7課 心と体の健康

第8課 身を守る－災害・事故・犯罪

第9課 創造力

第10課 社会問題

この内の第5課を資料として論文末に掲げた。

テキストは、基本的にはどの課から始めても良いように作られている。しかし、内容や表現の難易度は課が進むにつれて徐々に高くなっており、また最後の課は「社会問題」という大きな話題で、第1～9課までの全ての内容と関連性があるため、Bクラスでは1課から順に使用している。各課内に用意されている様々な活動（図1①～⑥）も、使い方や順序は本来自由だが、図1のような順序で進めている。また、このテキストを終了した後、Bクラスでは、本教材で学んだことを統合的に用いて行う「インタビュープロジェクト（図1⑦）」を応用活動として実施している。

本章では、2-1で本教材の全体的な特徴を述べ、2-2より各課内の活動について詳しく記述する。

#### 第10課 「社会問題」

「トピック1・2・3(②)」で、  
第1～9課までの学習を生かし、  
「社会問題」という大きな話題について話す

↓  
「タスク(③)」・「作文(⑤)」  
↓  
「宿題シート(⑥)」

応用 ↓

#### 「インタビュープロジェクト(⑦)」

テキストの中から興味のある話題、より詳しく知りたい、調べたいと思った話題について、グループ単位で日本人にインタビューをし、その結果をまとめて発表する

図1 教材使用の流れ

#### 第1～9課

「写真・イラスト(①)」などでのイメージ作りをする

↓  
「トピック1・2・3(②)」で、三つのセクションに分かれた質問に答えながら、様々な話題について話す

↓  
「タスク(③)」で、研究生生活に必要な技能を学ぶ

↓  
「会話(④)」

- ・「会話1」会話練習を行う
- ・「会話2」聴解練習を行う

↓  
「作文(⑤)」で課の内容を振り返り、書く力も養成する

↓  
付属教材「宿題シート(⑥)」

- ・「表現」と「言葉」の意味や用法を確認する
- ・「調べる」を用い、研究室などでインタビューする



#### 2-2 テキストの特徴

日本での研究生生活が円滑に行えるような能力を養成するのが、本テキストの目的であるため、テキストで取り上げる話題や場面は、研究留学生という属性をもった学習者にとって身近だと思われるもの、そして日々の生活で経験する可能性の高いものを選んでいる。また、研究をする上で必要になる技能（グラフを読む、説明を読んで実践する、発表するなど）も取り上げるようにしている。語彙や表現の選定についても、研究生生活を行う上で必要になってくるであろうものを、レベル別に分類されている語彙や文法事項（日本語能力試験等の基準）に関係なく行っているため、一般に中級レベル以上とされるようなものも含まれている。

漢字については基本的なものも含めて、全てにルビをつけてある。これは漢字の読み方が分からないために、会話や思考が止まってしまうことを防ぐためであり、本テキストにおいては、漢字の学習よりも内容に意識を集中させることを大切にしている。漢字系と非漢字系の混ざった研究留学生のクラスでは、漢字の知識に差があるため、このような配慮が必要なのである。

また、簡単な日本語で言い換えることが難しい語彙（例：病名）には英訳を付けている。これも会話や思考をスムーズに進めるためである。タスク等に使用される読み教材にも、読むことに集中するために語彙リストをつけ、その英訳を載せている。訳語としては英語のみを使用しているが、これは多くの研究留学生にとって英語が共通語であるという現状を踏まえたものである。

このテキストには付属教材として宿題シートが準備されている。授業では話すことと聞くことが中心となっているが、学習者は、宿題で「読む・書く」という異なる方法によって話したことを振り返ることができる。これには、教師側にとって、学習者の理解を確認するという意図も含まれている。また、この宿題シートには、教室で学習したことを教室外で使用する機会を提供する活動も用意されており、さまざまな方法でそれぞれの課を復習することを目指している。

### 2-3 写真・イラスト①



図2<sup>4</sup>

各課のはじめに、写真やイラストを載せ、これから扱う話題についてのイメージづくりをしている。この段階では、写真やイラストを見て自由に話しながら、話題に入っていく準備をする。また同時に、その話題に関

する語彙を少し紹介することも目的としている。

図2は第1課「教育」で使われている、小学校の入学式の写真である。この写真を見ることで、この課の話題である、教育や学校に対するイメージを喚起させることができる。

また、入学式や小学校といった、後で出てくる語彙を少し学んだり、さらに、背景の桜やランドセル、母親の着物姿など文化的要素に対する興味を持ったりすることで、スムーズにその課の学習に入ることができる。

### 2-4 トピック1・2・3②

ここでは、テキスト内の様々な質問に答えながら、身近で具体的な話題から自分の国の事情や一般論、社会的話題を話しあったり、意見を述べたりする。質問は、「トピック1」「トピック2」「トピック3」の三つのセクションに分かれている。

「トピック1」では、なるべく身近な話題を扱うようにしており、質問の多くには、基礎的な文型や語彙が使われている。質問は、単語ではなく文の形で答えやすいように書かれており、またここに用意された質問の答えを書き留め、それを並べて話すと、ある程度のまとまった談話が完成するように考えてある。これは、一問一答の単純な会話では終わることなく、ある程度まとまった内容を話すことで、「話せた」という満足感が生まれることを期待するものである。そのため、多くの課で、ペアで質問し合った後、パートナーのことについてある程度の長さの談話で友達や教師に報告することを要求している。「トピック2」「トピック3」では、「トピック1」とは違った観点から各課の話題を広げられるよう、さまざまな質問を用意している。「トピック1」に比べると、難解な語彙を使う必要が高くなり、また話題も一般的、客観的、抽象的なものになるように努めた。

第4課「食べ物」を例にすると、「トピック1」は、毎日の食事、「トピック2」は、家庭料理、「トピック3」は、食に関する問題となっており、この課の話題について多角的に考え、話せるようになっている。

「トピック1」では、「朝／昼／晩ご飯はどこで、誰と、何を食べていましたか。いまはどうですか。」「忙しいとき、食事はどうしていましたか。今はどうしていますか。」「日本で食べたいけれど食べていないものがありますか。それはどんなものですか。」等の食生活の変化を聞く質問、「日本で食事をしたり、食材を買ったりするとき、どんなことが大変ですか」といったエピソードを話す質問に答える。

「トピック2」では、日本の子供に人気のある家庭料理ランキングを見たり、「あなたの国で人気のある家庭料理は、どんな料理ですか」という質問に答える

形で、自分の国の料理を紹介したりする。

そして「トピック3」では、食糧自給率のグラフなどの資料から日本の食問題を学んだ上で、「あなたは食べ物に関してどんな問題に関心がありますか」という質問に、各学習者が答え、それについて話し合うという活動をする。

「トピック1・2・3」には多くの質問が並んでいるが、それに答え、自分の話したいことを言うためには、学習者にとって新しい語彙が大量に必要になってくる。つまり、ここは語彙を増やす場にもなっているのである。テキストには、用意された質問に答える際利用することのできる語彙が、ある程度載せられているが、必要な語彙、覚えたい語彙は各学習者によって異なり、必要なものを必要な時に学んだ方が効果的であろうという考えのもと、ほとんどの語彙は学習者の求めに応じて教室内で教師により提示される。また、学習者自身が自分の使いたい語彙を辞書で調べ、それをクラスで共有するケースも多い。

## 2-5 タスク(③)

「トピック1・2・3」では、話すことが中心な活動だが、ここでは、学習者が今後の研究活動や研究生活に役立つ様々な技能を学ぶための活動が用意されている。例えばディベートをする(第2課「家」：田舎 vs 都会など)、ネットを使って情報検索する(第3課「旅行」：目的地までの行き方)、インストラクションを読んで実践する(第4課「食べ物」：箸の持ち方、第9課「創造力」：科学実験)、文章を読む(第5課「教育」：キザニア東京について)、グラフを読み取り、説明する(第7課「心と体の健康」：死亡率のグラフ)、文字情報を読み取る(第8課「身を守る」：気象警報)、などであり、単に話すだけではなく、その他、大学で学ぶ中で必要になるであろう技能を身につける活動を行う。

また、文章を読みながら、それを「作文」のモデルとして利用する(第3課「旅行」：手塚治虫記念館への行き方、第6課「サイン」：ジェスチャー)場合もある。第1課では、「宿題シート」の「調べる」の準備

をする活動がタスクとして設定されており、タスクをしながら本テキストの使い方も学んでいけるようになっている。

## 2-6 会話(④)

会話には会話1と2の2種類あり、1は会話練習用、2は聴解練習用である。いずれも架空の登場人物である留学生(アン)を中心とした設定で、他の主な登場人物としては、アンの所属する研究室の助手や先輩(山田、伊藤)や同級生(岡田と留学生のソフィー)ホストファミリー(日本人の夫婦)が挙げられる。

この設定には、人間関係によって、異なるスピーチレベルが選択されることを示す目的がある。本テキストは、学習者がそれぞれ自分のことをクラスメートと語り合う活動が中心で、教室内ではスピーチレベルはほとんど問題にはならないが、研究室ではレベルの選択を意識しないことによって不利益を被る場合も考えられるためである。研究室文化はそれぞれ異なり人間関係も千差万別であるため、一般化することはできないが、Bクラスの学生には、テキストの会話を参考に自分の研究室をよく観察し、どのような日本語が話されているのか意識するように指導している。

会話練習用の1は、宿題で行うインタビュー時に実際に使用する会話のモデルとして、学習者が運用できる「です・ます体」を基本としている。聴解練習用の2は、聞いて理解することを目的としているので、助詞の省略や縮約形(〜とく、〜なくちゃなど)、くり返しや言いよどみなど、会話でよく使われるものも盛り込んでいる。

## 2-7 作文(⑤)

すべての課には、作文課題が用意してある。これは、書くという作業を通じて、課の内容を振り返り、整理すると同時に、書く能力の養成も意識した活動である。ここでは、与えられた課題に対する自分の意見を、トピックやタスクで学習したことをもとに、文章によって表現することが求められる。したがって、授業に参

加していれば、作文で使用する語彙や表現の多くは、テキストや授業中にとったノートの中から探して書けるようなものになっている。

作文課題は複数用意しているが、これは個人の興味や関心、書きやすさ、日本語のレベル差等に配慮したものである。

## 2-8 宿題(⑥)

宿題シートは「表現」、「言葉」、「調べる」の三つのパートから成っている。「表現」のパートではテキストの質問の中から、汎用性のある表現を3～5例選び例文を提示している。以下のように、学習者は例文に従って、下線部に自分のことについて書く。このように、授業中話したことを書くことによって、表現を再確認することができる。

例：週に二回、研究室の先生に会います。

週に \_\_\_\_\_ 回、 \_\_\_\_\_。

また「言葉」のパートでは、4～6個の語彙を選び、以下のように短文の中に書き入れることで、意味を確認しながら使い方が学べるようになっている。

- ・日本の（ ）は小学校と中学校の九年間です。
- ・日本の高校への（ ）は90パーセント以上です。
- ・大学に入るためには、（ ）（ ）に合格しなければいけません。
- ・高校生の時、好きだった（ ）は、数学と物理でした。

科目	義務教育	入学	進学率	試験
----	------	----	-----	----

「調べる」のパートでは、各課の話題に関する質問を、研究室の友人や先輩、ホストファミリーなどにインタビュー形式で聞きシートに書き込む。インタビューの実施日、場所、相手とインタビュー後の感想はすべての課に共通している項目である。以下に各課の質問項目を示す。

第1課 「教育」 研究室文化（例：研究の方法はだ

れかに教えてもらいますか。研究室には、何かルールがありますか、など）<sup>4</sup>

第2課 「家」 家の探し方や、決めた理由

第3課 「旅行」 夏休みの旅行のアドバイス（お勧めの場所や行き方など）

第4課 「食べ物」 得意料理の作り方

第5課 「仕事」 アルバイトの経験や卒業後の夢

第6課 「サイン」 町の中や寮、研究室で見つけたマークとその意味

第7課 「心と体の健康」 健康法やダイエット法

第8課 「身を守る」 この世で一番こわいもの

第9課 「創造力」 便利だと思う発明品やこれから発明されたいと思う物

第10課 「社会問題」 関心のある社会問題

学習者は教室内で共通の話題に関して、クラスメートや教師と十分に話し、聞き、読み、書いた経験をもとに、研究室の先輩や友人、ホストファミリーと話す。この宿題には教室外での日本語の運用を促す目的がある。そしてその結果をまた教室へ持ち帰り、クラスメートとその経験をシェアすることによって、各話題への理解もさらに深まっていくといえるだろう。

Bクラスでは本テキスト終了後、応用活動としてインタビュープロジェクトを行っている。学生は各課の宿題で練習を積み、インタビューの形式に慣れることで、発展的な学習であるプロジェクトにも、無理なく取り組めるようになっている。

また、研修コースの学生は大半がコースの終了後、研究室の一員となり研究に専念することになるが、この10回に及ぶインタビューを足がかりに、研究室での人間関係を築いてほしいというねらいもある。

## 3 学習活動例

ここでは、本教材を用いた学習活動例として、Bクラスで行っているものを2例紹介する。3-1で作文のフィードバックを、3-2でインタビュープロジェクトについて述べる。



### 3-1 作文のフィードバック

2-7 で述べたように、このテキストにはすべての課に作文課題がある。時間に余裕があれば授業中に書くこともあるが、たいてい宿題になっている。作文は教師によって集められ、フィードバックは3～4課分をまとめて、以下の手順で行う。

- (1) 教師が、各課一名の作文を選び、コピーをしてクラス全員に配布する。教師の添削は最小限にとどめ（表記の訂正以外は、下線を引くだけで訂正はしない）学生間の話し合いを促す。
- (2) クラス内で学生の作文を教師、学生がともに検討、添削する。学生同士は、口頭もしくは筆記でコメントする。
- (3) 作文が選ばれた学生は、コメントをもとに再度書き直して提出する。  
選ばれなかった学生は、教師が添削した作文を受け取り、その場で訂正を行う。
- (4) 書き直した作文を文集にしてまとめる。

フィードバックはまとめて行われるため、課によっては作文を書いた後から数週間が経っていることもあるが、学生にとってはテキストの内容を思い出すよい機会となっているようである。また、自分が知っている学生が書いた文章を読むということは、それだけで読む楽しみがあり、学習動機も高まるといえるだろう。以下はフィードバックで学生がクラスメートに書いたコメントの一部である。

- ・ あたらしいことばですから、ありがとうございます。
- ・ includes interesting connectors (e.g. ほんたいに) that I didn't know, this gives body and formality to the essay.
- ・ I think your grammar is very good, next time teach me again, please. The organization and content is also very good.

これらのコメントからもわかるように、クラスメー

トの作文の添削を通して、新しい表現を学んでいる学生も多い。教師が各学生の作文を添削するだけのフィードバックでは見られない効果である。

また、作文の構成や段落などについて、以下のように学生同士意義のあるコメントが出るケースも多い。これは、研究留学生としての母語での論文やレポート作成の経験が生かされていると思われる。

- ・ たくさんだんらくがあつて、だんらくが5つありますよ。
- ・ The text is well structured and the ideas follow the line of thinking proposed. The comparison grammar structure was well used to explain reasons and concepts.

しかし学生によっては、ただ「いいです」というコメントだけで終わらせてしまうこともある。その場合は、作文を書き直すことの重要性を説明し、そのために役立つコメントを書くように指導している。

### 3-2 インタビュープロジェクト

2-1 で述べたように、Bクラスでは本テキスト終了後、応用活動としてインタビュープロジェクトを行っている。このプロジェクトは以下のようなスケジュールで進められる。

- 1 日目 テーマの選択、グループ分け、  
質問シートの作成と結果の予測
- 2 日目 インタビューの練習、実施（テープレコーダーで録音）、報告書の提出
- 3 日目 結果のまとめ
- 4 日目 発表原稿、配布資料の作成
- 5 日目 発表（ビデオに録画）、質疑応答、  
発表のフィードバック

インタビューは2～3名ずつのグループで行う。1日目は、グループごとに、テキストの話題から、より理解を深めたいものを一つ選択し、インタビューしたい項目を考え、質問シートを作成する。そして、インタビューの結果を予測する。第26期の学生は「教育」

「旅行」「健康」「食生活」をテーマとして選んだ。

以下は、「食生活」を選択したグループの質問シートである。

- ・どんな食べものが好きですか。
- ・朝ごはんはと昼ごはんはとばんごはんはだれとどこで食べますか。どれぐらい時間を使いますか。
- ・しゅうまつに（休みのときは）どうですか。
- ・インスタント食品をよくりようしますか。週に何回食べますか。どんなものを食べますか。くだものとやさいをよく食べますか。あげ物をよく食べますか。
- ・あなたの食生活についてどう思っていますか。健康のために、いいですか。どんな食品を食べなければなりませんか。
- ・外国料理は食べたことがありますか。よく食べますか。どんな料理を食べますか。どうですか。

二日目は、まずインタビューを実施する際の注意事項をクラス全体で確認する。例えば初めに自分たちから名乗り、インタビューが日本語の授業の一環であることを説明することや、インタビューを録音してもよいか許可を取ることなどである。次に、教師を相手にインタビューの練習を行う。3名のグループの場合、実際にインタビューをする学生、メモを取る学生、録音する学生、のように担当を決めてお互いに協力するよう指導している。この担当はインタビューごとに交代することが望ましいが、実際は学生の自主性に任せている。

練習では、インタビューの流れや日本語が聞き取れなかったときの対処のしかたなども確認する。練習後は、教室外へ出てインタビューを実施する。終了後は教室へ戻り、どこで何人にインタビューをしたか、など簡単な報告書を教師に提出する。

三日目は、録音したテープと記録したメモをもとに結果をまとめ、四日目に発表原稿と発表時に配布する簡単な資料を作成する。発表原稿は、次のような構成で書くよう指導している。

- (1) このテーマを選んだ理由などを述べる
- (2) インタビューの結果を報告する

(3) 結果からわかったことや考えたこと、予測や他の情報（本やインターネット）との比較などを発表する

(4) 終わりの言葉を述べる（これで私たちの報告を終わります、等）

最終日の五日目は、グループごとに配布資料を用いながら結果を発表する。「食生活」のグループは、学生と社会人の食生活を比較し、結果を帯グラフと表を用いて示した上で、結論を以下のようにまとめていた。

- ・一般的に社会人はとても忙しいです。それで、食べる時間が短いです。でも、社会人はみんな家で朝ごはんはと晩ごはんを食べます。
- ・社会人と学生では社会人のほうが食事に野菜が多いです。
- ・驚くほどに多くの人は日本料理が好きです。
- ・時々インタビューをした人の好みと食生活が違います。
- ・多くの人は魚や野菜が好きだと言ったのに、時々みんなはあげ物とインスタント食品を食べます。
- ・学生はよく教育を受けましたから、外国料理をよく知っています。

発表後は毎回、学生間で活発に質疑応答が行われている。発表の様子はビデオで録画し、後でフィードバックに用いる。フィードバックは学生同士のコメントを中心に言い、教師がそれに補足する形をとっている。コメントは、質問内容に関するものや結果のまとめ方、配布資料の見やすさなど多岐にわたる。

発表の終了後、学生がこのプロジェクトをどのように捉えていたかを知るため、感想やこれからの要望などを各自自由に記述してもらった。使用言語は英語でも可としたが、第26期ではクラスの半数以上が日本語を使用していた。全体的に、以下のような肯定的なコメントが多く見られた。

- ・ This project is a very good way to learn Japanese. It's practical to use the language in daily life.
- ・ このプロジェクトはとてもおもしろかったです。

- ・日本人の日本語をわかる。
- ・アンケートのぶんのれいはゆうようなぶんでした。そして、つぎのインタビューとわたしのせんもんしらべるのときにつかえます。

教室外でも日本語でコミュニケーションが取れたという経験は、学生たちの自信につながったようである。その反面、日本語力の不足からさらなる日本語学習の必要性を感じた学生もいたようである。

- ・日本人と話すことは私の学しゅうにいいです。日本人とはなしにくいであまりわからなくても、そのけいけんがひつようでした。でもまだふつうのはなしができないと思います。
- ・インタビューするとき、私たちは日本語をれんしゅうしました。そして、日本語を習うために、たくさんれんしゅうしなければなりません。

また、以下のコメントから、学生がこのプロジェクトを通して学んだのは言語面だけではないといえる。

- ・ I also make new friends during this project. However, sometimes I feel uncomfortable to walk into Japanese and interrupt them.
- ・インタビューしたので、新しいデータがあります。
- ・インタビューしましたはとてもおもしろかったです。たくさん日本人の学生はききました。大体日本人はやさしかったです。でも少し人インタビューしたとき、きらいです。たぶん、私たちは外国人からです。それからこわいと思います。

中にはインタビューを断られたグループもあったようだ。このようなコミュニケーションを拒絶されるといっても、学生たちにとって貴重な経験となったと思われる。

このプロジェクトによって、学生は本テキストで身につけた、研究活動や研究生生活に役立つ知識と技能を統合的に活用しながら、関心をもった話題について理解を深め、発表の形式で伝えることができる。さらに、

このプロジェクトは、日本語での生活の現実に触れ、それに自ら対処する方法を学ぶ機会にもなっている。この経験は学生が今後、自立した大学生生活を送る上での助けとなるはずである。

#### 4 まとめと今後の課題

本稿では、研究留学生を対象とした初中級教材『日本語で研究生生活』の作成意図とその経緯を述べ、このテキストの構成と使用方法および活動例について詳述した。さらに応用活動として、Bクラスで行っている作文のフィードバックとインタビュープロジェクトも紹介した。

この教材では、学習者がさまざまな話題について質問し、情報を引き出し、それを活用して、研究留学生としての自己の考えを述べることを重視している。ここで紹介した本教材とそれを用いた学習活動を通して、学習者は日本語の基礎的な能力や一般的なスタディスキルに加え、研究活動に必要な技能も身につけることができる。また、自立的に研究生生活を進めるために不可欠なネットワークをも作ることができる。つまり、この教材が研究生生活への橋渡しの役割を果たしているとも言えるだろう。

今後の課題として、宿題シートにおける自由度を高め、語彙や表現に関して学習者自身も選択できるようにすることや、会話2の音声教材の作成などによって、現在のテキストを整備することなどが挙げられる。また、インタビュープロジェクトは応用活動として行われ、テキストに収められていないが、学習活動の集大成として、将来的にはテキストに組み込むことを目指している。

#### 注

1. 2008年度春学期よりテキストの汎用性を考慮し『聞こう！話そう！質問しよう！－対話で広げる大学生生活－』に改称。
2. International Student Center Osaka University (1998) 『A Reference Manual for Learners of Japanese SPEAKING PERSONALLY AND

LEARNING TO USE JAPANESE』

3. 現在は改定され、西口光一 監修 沢田幸子・武田みゆき・福家枝里・三輪香織 著(2006)『日本語 おしゃべりのたね』スリーエーネットワークとして出版されている。
4. 国際交流基金 みんなの教材サイト  
<http://momiji.jpf.go.jp/kyozai/>

5. 三牧陽子・内藤（都築）裕美・林洋子・服部圭子・福良直子・藤澤好恵(2005)「『理工系研究室文化』における規範意識と情報伝達」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』 pp.232-235 を参考にした。

参考文献

大阪市教育委員会(2002)『あいうえおで日本語』

## 5. 仕事

これはどんな仕事をしている人だとおもいますか？  
(※看護士と消防士とコックのイラスト)

### トピック1 どんな仕事をしたことがありますか？

・仕事の経験について、となりの人と話しましょう。メモをとってください。  
彼で発表します。

今まででどんな仕事をしたことがありますか。  
アルバイトをしたことがありますか。

その仕事で、どんなことが良かったですか。また、どんなことが失敗でしたか。

(仕事をしたことがない人は) 家族や友だちの仕事について話してください。

### トピック2 いろいろな仕事

・どの仕事がいいと思いますか。下の□から選んでください。  
敵が大好きです。 笑きい蒙や驚いビルを みんなの娯楽を 作ってみたいです。 守りたいです。

スペイン語と英語と ロケットに乗って 絵を描くのが  
日本語が話せます。 学童へ行きたいです。 得意です。

宇宙飛行士:astronaut 弁護士:lawyer 栄養士:dietitian 会計士:  
accountant 作曲家:composer 画家:painter 建築家:architect  
作家:writer 漫画家:cartoonist 美容師:beautician 教師:teacher  
歌手:singer サッカー選手:soccer player 外交官:diplomat  
警察官:police officer 会社員:office worker 銀行員:bank clerk  
公務員:government employee 大工:carpenter 通訳:interpreter

- ・上の仕事には、どんな能力が必要ですか。どんな性格の人がいいですか。
- (例) サッカー選手は、速く走れる人がいいです。銀行員はまじめな人がいいです。)
- ・みなさんは子供の時、何になりましたか。どうしてですか。
- ・次の表は、日本の大學生に人気のある会社のランキングです。

1位	サントリー
2位	全日本空輸 (ANA)
3位	トヨタ自動車
4位	資生堂
5位	JTB
6位	松下電器産業
7位	三菱東京UFJ銀行
8位	JAL (日本航空)
8位	みずほフィナンシャルグループ
9位	東京海上日動火災保険

(2006年2月9日 / 日本経済新聞より)

- ・みなさんの知っている会社はありますか。どうして入社があるのでしょうか。
- ・みなさんの国では、どんな会社が著名ですか。それは何の会社ですか。

### トピック3 どうやって仕事を探しますか？

- ・みなさんの国では、失学率はどうかやって仕事を探しますか。

いつごろから探し始めますか。

履歴書を書きますか。どんなことを書きますか。

試験や面接がありますか。

- ・みなさんは仕事を選ぶ時、どんな条件が大切だと考えますか。

仕事の内容？ 給料？ 勤務時間？ 勤務地？ 休日？ この中で3つを選んで、一番大切なものから三番目に大切なものまでを書いてください。

1 ( )

2 ( )

3 ( )

- ・上の条件の他に、どんな条件が大切だと考えますか。

・失学を卒業した後、どこで働きたいですか。自分の国で？ 日本で？ その他の国で…？

その理由も教えてください。

- ・みなさんの国では、失学を卒業したら、必ず就職できますか。

### タスク ～読みましょう～

2006年10月5日、東京江東区に「キッズニア東京」がオープンしました。これは、2～12才の子供が、対象の、職業、体験施設です。

キッズニアは1999年、メキシコで生まれました。東京が2か所目です。中には、病院、テレビ局、劇場、ピザショップ、新聞社など約50の企業があります。これらは、実際にある企業で、体験は小さく作られています、制服は、本物そっくりです。

まず銀行へ行き、受付でもらったトラベラーズチェックを「キッズ」に、尚替します。「キッズ」とは、キッズニアだけで使えるお金です。体験できる職業は、約70種類あります。やってみたい職業を選んだら、スタッフの説明を聞いて、制服に、着替えて体験します。約30分働いて、給料8キッズがもらえます。ハンバーガーショップやソフトラクリームショップでは、給料のほかに作ったものももらえるので、人気があります。

裁判所の仕事をした小学校3年生の女の子は「今までこんな職業があることも知らなかったけれど、興味がもてました。もらったお金でデパートで買い物をしたい。」と言っていました。13才～15才の人も希望すれば体験できます。入場料は2～3才1500円、4～15才3000円、16才以上2000円です。

(参考記事：2006年9月30日 読売新聞)

- 1 対象: target 2 職業: 仕事 3 体験: experience 4 施設: facility  
5 劇場: theater 6 企業: 会社 7 実際に: really 8 制服: uniform  
9 本物: exactly like real 10 受付: reception 11 両替: money exchanging  
12 説明: explanation 13 替える: change one's clothes 14 へのほかに: besides  
15 裁判所: a court of justice 16 興味: interest 17 希望すれば: if they want

～質問に答えましょう～

1. キッザニア東京は、どんな施設ですか。
2. キッザニアは、どこで生まれましたか。
3. キッザニアには、どんな企業がありますか。
4. キッゾとは何ですか。
5. 約30分働いて、給料はいくらもらえますか。
6. ハンバーガーショップやソフトラクチームショップはなぜ人気があるのですか。
7. みなさんの国にも、キッザニアのような施設がありますか。

作文

- 次の三つのトピックから、一つ選んで作文を書きましょう。
1. 仕事の経験
  2. 卒業後の夢 (どんな仕事をしたいですか?)
  3. 仕事を運ぶ時の条件 (どんなことが大切だと思いますか。仕事の内容? 給料? その他...?)

会話1 ～アルバイトについて聞く～

アン: やまだ 山田さん、今ちょっといいですか。  
やまだ 山田: うん、いいよ。何?  
アン: 日本語の宿題なんですけど、アルバイトについて教えてもらいたいです。  
やまだ 山田: アルバイト...、大学が忙しいから今はしてないけど。  
アン: そうですか。じゃあ、今までにどんなアルバイトをしたことがありますか。  
やまだ 山田: そうねえ...。高校生の時、近所のスーパーでレジの仕事をしたり、大学一年生の時は家庭教師をしたり、居酒屋で働いたりしたなあ。  
アン: たくさんありますね。どの仕事が一番楽しかったですか。  
やまだ 山田: 居酒屋かな。大変だったけど、たくさん友だちができたし。  
アン: そうですか。ありがとうございます。

会話2 ～就職活動について話す～

岡田: はあー。お金がない。  
アン: どうしたの?  
岡田: 昨日、リクルートスーツ買ったんだ。  
アン: へえー。  
岡田: ドクター行くな、就職するか迷ったんだけどね...。いろいろ考えて就職活動することにしたよ。  
アン: 就職活動って、どんなことするの?

岡田：履歴書を書いて、何回も試験や面接を受けなくちゃいけないんだ。  
 アン：そうか……。でも岡田さんなら、きっと大丈夫だよ。がんばって！  
 岡田：ありがとう。うまくいけばいいんだけど。

## 宿題

名前

### 1. 表現 ～ 例を見て、文を完成させなさい。～

(1) 例：子供の時、私はパイロットになりましたかったです。

子供の時、私は\_\_\_\_\_。

(2) 例：サッカー選手は、速く走れる人がいいです。

\_\_\_\_\_は、\_\_\_\_\_人がいいです。

(3) 例：日本では、サントリーという会社があります。サントリーはお酒を作っている会社です。

私の国では、\_\_\_\_\_という会社が有名です。

\_\_\_\_\_は、\_\_\_\_\_会社です。

(4) 例：私は旅行会社で働いてみたいです。いろいろな国に行けますから。

私は\_\_\_\_\_。

### 2. 言葉 ～ 下の口から適当な言葉を選んで、( ) に書きなさい。～

(1) 私の会社の ( ) はとても安いです。

(2) 私の会社の ( ) は午前8時から午後5時までです。

(3) 日本では ( ) の時、スーツを着る人が多いです。

(4) ( ) には、卒業した学校の名前やその会社で働きたい理由などを書きます。

(5) 私の国では、大学を卒業しても ( ) するのがむずかしいです。

面接	勤務時間	履歴書	就職	給料
----	------	-----	----	----



### 3. 調べる ～インタビュー～

研究室の友達や先輩は、どんなアルバイトをしたことがあるか、聞いてみましょう。

卒業したら、どんな仕事したいか聞いてみましょう。

インタビューした日	
インタビューした場所	
インタビューした人	
どんなアルバイトをしたことがありますか：	

卒業したらどんな仕事したいですか：

インタビューした感想